

■肢体不自由のある子どもへの実践事例

マルチメディアDAISY図書が身近な読書活動の一つとして活用されることを目指して

横浜市立上菅田特別支援学校
黒沢 千瑛美

はじめに

本校は、肢体不自由のある小学部から高等部までの子どもたちが在籍する特別支援学校で、現在217名が在籍しています。自立活動を主体とした教育を行っている子どもから、おもに知的代替の学習に取り組んでいる子ども、教科学習を行っている子どもまで、発達段階はさまざまです。

昨年度は、小学部の学級単位での集団授業や、個別または小人数で行う子どもの実態に合わせた課題学習の授業で、マルチメディアDAISY図書を活用する取組を中心に研究を行いました。

昨年度の研究成果と課題をふまえ、今年度も同じ研究テーマの下、マルチメディアDAISY図書がより身近なものになるように取り組んできました。さまざまな取組の中で、子どもの実態に合わせた課題学習での活用と、休み時間中の活用を中心にご報告します。

マルチメディアDAISY図書活用 の実際

(1) 昨年度の実態

昨年度は、iPadのマルチメディアDAISY図書とCDを併用して研究を行いました。iPadは、1台を常時図書室に置き、誰でも図書室で使えるようにしました。そして、2台をお試し週間で活用しました。お試し週間以外では、司書教諭が管理して授業等で使う際に貸出を行いました。

CDについても、授業で自由に使えるように教員に貸出を行ってきました。また、職員会議等で教職員に周知するなど、活用の推進を図りました。年度の途中から徐々に興味を示す子ども、教員が見られるようになり、気軽に使えるという理由で、iPadの方が比較的多く活用されました。

しかし、実際に活用した教員は2割弱にとどまり、課題が多く見られる1年となりました。

(2) 今年度の取組

昨年度の実態をふまえ、iPadのマルチメディアDAISY図書を継続して3台お借りし、CDと併用して研究を続けました。iPadは、図書室とひだま

りコーナー（学校図書館附属施設）に1台ずつ常時置いておき、誰でも自由にマルチメディアDAISY図書で読書を楽しめる環境作りをしました。残りの1台は、司書教諭が管理し、授業で使えるように貸出を行いました。

また、肢体に障害のある子どもたちが気軽に利用できるようになるには、まずは教員間にマルチメディアDAISY図書の存在と活用方法を浸透させることが大切だと考え、実際にiPadを操作しながら活用の仕方を説明する場を全教員対象に設けました。

その後、図書室やひだまりコーナー、授業での利用が見られるようになりましたが、利用者が固定化される傾向が見られたことから、iPadを各学年で回覧してより多くの子どもたち、教員が手にとって試せる期間を設定しました。各学部にいる図書担当の教員が積極的に授業等で活用することで、他の教員にも興味・関心や手軽さを感じてもらえるように働きかけたり、子どもたちの実態に応じた使い方を、司書教諭が個別で担任に伝えたりするなど、推進を図りました。

①ひだまりコーナーでの活用

本校の学校図書館には、附属施設として「ひだまりコーナー」という場所があります。この施設は、保健室や体育館、自立活動室の近くに位置します。

また、図書室の利用が比較的少ない中学部・高等部の生徒の教室からも近い場所になります。施設には、DVD、大型絵本、市立図書館から借りた絵本、マルチメディアDAISY図書などさまざまな図書があります。人が行き交う温かな場所で、子どもたちは車いすや長いすに座り、日頃から気軽に読書に親しんでいます。

ひだまりコーナーでマルチメディアDAISY図書を活用する利点が、いくつかあります。まず、施設の立地が良いという点です。誰もが足を運びやすい場所にあるため、昼休みなどの時間にも気軽に立ち寄り、気に入った図書を楽しむことができます。子どもたちの中には、ひだまりコーナーで図書に親しむ友だちを見かけることで自分も読書をしたと思う子どももいます。また、ひだまりコーナーが好きという理由で、この場所で読書をする子どももいます。

次に、ひだまりコーナーだと音を出しやすいという点です。教室での課題学習では、複数の子どもが同時に異なる学習に取り組みます。他の学習をしている子どもにも配慮し、かつ本人が聞き取りやすい音量でマルチメディアDAISY図書を楽しまたい時には、ひだまりコーナーを利用することが有効になります。



ひだまりコーナー

②課題学習での活用

・小学部5年 男児1名 『ぐりとぐら』を使用

小学部には、「国語・算数・課題学習」という授業があります。この授業では、教科書を使った国語や算数の学習、実態に合わせた教材を用いての平仮名や漢字、数字、形などの学習、物をつかんで入れるといった手指操作の向上を目標にした学習など、個に応じた課題に取り組めます。授業形態は、教員と1対1の個別、2・3名の小集団や学級単位での集団になります。

この子どもは読書が好きで、5年生になってからは『エルマーのぼうけん』シリーズを好んで読んでいます。しかし、障害があるため、大人がページをめくり、声に出して読むことが必要になります。大人がいなくても、一人で読書を楽しむことができるように

なると、主体的に学習に取り組んだり、休み時間や余暇の過ごし方も広がりが見られるようになったりすると考えられます。

そこで、課題学習の時間にマルチメディアDAISY図書を活用しました。

また、今後もいつでも気軽に読書ができるように、iPadの斜面台はこの子どもの持ち物で作っています。

読書中は、iPadに視線を向けて、集中して見聞きしている様子が見られました。自動で絵や文が変わることで、一人で読書をすることができました。「僕にもできる」、「一人でもできる」という前向きな気持ちが、この子どもの学習への意欲につながることを期待したいです。



一人で読書をする様子

③休み時間での活用

・高等部3年 女子生徒2名 『ぼくのぼうけん』を使用

一人は視覚からの情報が優位で、もう一人は聴覚からの情報が優位となり

ます。そのため、視覚優位の生徒側にiPadの画面を近づけて使用しました。マルチメディアDAISY図書は、どちらの実態の子どもでも使うことができるため、友だちと一緒に読書を楽しむことができました。単調な読み方が気になりますが、iPadを操作する教員が、音声に続き抑揚をつけて読むことでより話に興味を示す様子が見られました。



友だちと一緒に読書をする様子

おわりに

教員の認知度や使用状況を知るために、今年度も「マルチメディアDAISY図書活用アンケート」を実施しました。その結果、「マルチメディアDAISY図

書」という名前を聞いたことがある教員は8割で、本校の取組を受けてその存在を知った人が多いことがわかりました。

また、実際に使用したことがある教員は全体の4割程でした。昨年度の認知度は7割で、使用状況は2割だったため、興味をもって使う人が増えてきたと言えます。

しかし、知っていても使ったことがない人が全体の半分程いるため、今後も活用への意識づけが必要だと感じます。

本校には、文字を読むことが難しい子どもたちもいます。一覧（本だな）の場面で、文字を読むことができなくても話に興味をもてたり、どのような話かイメージをもてたりできるように、イラストなどの手がかりがあると、より使いやすくなると感じました。

マルチメディアDAISY図書は、障害の有無にかかわらず読書に親しめるツールになります。自分の意思で誰もが読書を楽しめるような環境作りに今後も取り組んでいきたいです。